

資料館だより

since 1967

《展示品解説》

ぶっぱつがたす え き へん 古代の仏鉢形須恵器片



写真1
常設展示風景

世田谷区瀬田^{せた}1・2丁目に所在する瀬田遺跡からは、仏教と関わりのある種々の遺物が、小破片ではありますが出土しています（註1）。現在、本館2階の常設コーナーでそれらを展示していますが【写真1】、近年、また新たな仏教関連遺物の存在が報告されました（註2）。器形としては「鉢」にあたるものですが、やや特殊な形状を呈す須恵器の破片です。それは、僧侶が托鉢に用いたり尊像などへ供物を捧げる際に用いたりする仏具で、普通の鉢とは別けて「仏鉢」や「鉄鉢」と称しているものです（以後は主に「仏鉢」と記します）。僧侶や寺院との関連が想定できる遺物ですから、破片とはいえ実に貴重な出土品なのです。本稿ではこの遺物について、少し詳しく解説してみようと思います。

この遺物は、瀬田遺跡のほぼ中央にあたる瀬田1丁目の個人住宅地で行われた発掘調査において、平安時代前期の住居址（146号住居址）から出土しました（註3）。口縁部から底部近くまでが繋がって残る破片だったため【写真2】、器形がはっきり分かる点は重要です。その特徴は、口縁が内側に湾曲して底部が丸底^{まるぞこ}である、というところにあります。これは、典型的な仏鉢の形状です【写真3】。この種の器でよく知られているものとしては、正倉院に多く伝わる奈良時代の仏鉢があります（註4）。緑の発色が美しい陶器で、奈良三彩と呼ばれているものです。これらはもともと東大寺羅索院の双倉^{けんさく ならびくら}にあった器で、後に正倉院へ移された寺院什物^{じゅうもつ}です。奈良三彩は、貴族など上層階級の用いる食器類とのイメージが一般に強いと思いますが、器形云々というより奈良三彩そのものが、一部を除き、仏具や供養具としての使用を主な本分としていたのではないかと、との見方も提示されています（註5）。



写真 2
瀬田遺跡出土の
仏鉢形須恵器片

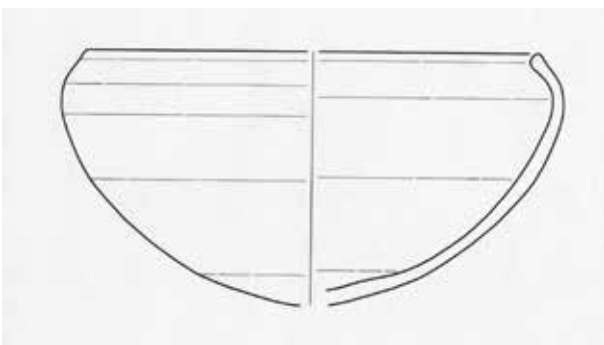


写真 3 仏鉢形須恵器片実測図
(『瀬田遺跡・瀬田城跡XI』より)

ということは、それを単純に解すると、奈良三彩が出土すれば、それはすなわち寺院址の存在も想定されてよいことになります。しかし、奈良三彩は住居址から出土するケースが特に東日本で多いとの指摘があり(註6)、事はそう単純ではなさそうです。それはともかく、世田谷区ではこれまで奈良三彩の出土例がないようです。遺構や遺物の傾向を考えれば、瀬田や喜多見の辺りは出土が期待できる地域と言えます。宗教的な領域と深く関わりがあるものに間違いはないと思われることから、寺院と直結するものではないとしても、奈良三彩の出土は寺院の存在を考える上で大きな意味を持つものとなり得ましょう。今後の発掘成果が実に楽しみです。

三彩はさておき、瀬田遺跡出土の仏鉢形須恵器片に話を戻しますが、この遺跡では今回紹介のもので

4例目の破片出土となります。他の3例は第26次調査(2007～08)時に見つかっており【写真4】、2009年刊行の報告書(『瀬田遺跡V』)で確認できます。それによれば、1つは12号掘立柱建物址(平安時代〔9C末～10C初頭〕)から須恵器口縁部の破片、また1つは10・12・13号掘立柱建物址周辺のピット(平安時代〔9世紀後半〕／ピットは穴、窪みの意)から同じく須恵器口縁部の破片、残る1つは遺構外出土遺物で、やはり須恵器口縁部の破片です。遺構外とはいえ、同形の破片が出土した12号掘立柱建物址やピットに近い表土から見つかっており、先記報告書では掘立柱建物址と関連する遺物である可能性が高いと述べています。瓦塔片(遺構外出土遺物／但し、仏鉢形須恵器片が見つかった掘立柱建物址の近くから出土)や「寺」と墨書された土師器坏(125



写真 4 瀬田遺跡から出土した他の仏鉢形須恵器片



写真5 瓦塔片

号住居址出土／平安時代〔9世紀第二四半期〕もこの時の調査で出土しています【写真5・6】。瀬田の地に古代寺院があったことはほぼ確実、と個人的には考えています（註7）。

今回紹介の破片もさほど大きなものではありませんが、仏鉢形の土器片を複数出土している意味は実に大きなものがあることを再度強調しておきたいと思えます。文字情報ではつかめない古代世田谷の姿を、発掘品が雄弁に語ってくれていることになるからです。かつて世田谷の古代を語る際、寺院の存在などその可能性すら言及されることはありませんでした。しかし、今述べてきた内容をふまえれば、もはや可能性ではなく、存在していたと見做すのが自然な認識と言っても言い過ぎではないでしょう。さらに決定的な遺物の出土と、堂塔などの寺院建造物遺構の確認報告が待たれるところです。

当資料館古代・中世の常設展示には、人々の生活に深く影響を及ぼした仏教との関わりに注目してもらいたいという展示コンセプトがあります。今のところごく僅かな展示品の数ではありますが、こうした仏教関連遺物を通じ、古代世田谷の新たな情景に想いを馳せていただきたいと思います。

（学芸研究員 鈴木 泉）

【註】

- 1) 仏鉢形須恵器片が複数出土している以外にも、瓦塔片や「〇寺」と墨書された土師器坏が出土しています。この坏は寺院で使われていた可能性が高い遺物です。なお、火葬墓の出現も仏教思想と密接に結びついています。
- 2) 世田谷区教育委員会『瀬田遺跡・瀬田城跡XI』（2022）。



写真6 墨書土師器坏

- 3) 第33次調査。調査期間は2012年8月20日から9月10日の約3週間で、調査面積は約74㎡でした。翌年に調査略報が刊行されていますが、特に仏鉢形須恵器の出土に関する記述はありません。
- 4) 正倉院の正式名称は「磁鉢^{じはち}」です。中国・唐の三彩を真似た国産陶器で、総てが三彩というわけではなく、二彩や一彩のものもあります。
- 5) 榎崎彰一「日本における施釉陶器の成立と展開」（愛知県陶磁資料館『日本の三彩と緑釉』（1998）所収）。
- 6) 矢部良明『日本の美術 408 唐三彩と奈良三彩』（至文堂 2000）
- 7) 喜多見の諸遺跡から出土している古代の布目瓦片も、寺院の存在を示唆する貴重な遺物です。これらも常設コーナーで展示しています。

【主要参考文献】

- * 世田谷区『新修世田谷区史 上巻』（1962）
- * 世田谷区『世田谷区史料 第8集 考古編』（1975）
- * 正倉院事務所『正倉院宝物 南倉』（朝日新聞社 1989）
- * 矢部良明『日本の美術 408 唐三彩と奈良三彩』（至文堂 2000）
- * 世田谷区教育委員会『瀬田遺跡V』（2009）
- * 世田谷区『往古来今』（第二版 2018）
- * 世田谷区教育委員会『瀬田遺跡・瀬田城跡XI』（2022）
- * 世田谷区立郷土資料館『世田谷の歴史と文化 世田谷区立郷土資料館展示ガイドブック』（2024）

縄文時代の変った「かたち」から

今年度から当館では、新たな試みとしてロビーの一角でコーナー展示を始めました。

考古部門では「かたち」をテーマに、区内ではまだ2点しか見つかっていない三角柱状土製品を中心に、土偶、台形土器（器台形土器）など縄文時代の土製品を展示しました。今後も普段収蔵庫に眠っている資料を中心に、テーマ別で展示を行っていく予定です。ここでは、展示品の中から三角柱状土製品を紹介します。

三角柱状土製品は、三角壩形土製品とも呼ばれ、横断面が三角形になる柱状の土製品です。縄文時代中期（約 5,500 ～ 4,500 年前）の北陸地方を中心に東日本の遺跡から見つかっています。

瀬田遺跡(瀬田1・2丁目)の三角柱状土製品(写真1)

長軸長:(7.8) cm 短軸長:(4.2) cm 高さ:(4.3) cm

三角形の側面と長方形の一面が大きく破損していますが、破損した断面の長軸方向に沿った孔内に線条痕が観察できます(写真1左下)。長方形の面には沈線で区画された中に斜縄文が、三角形の面には周囲に刺突文が施されています。平成 27 ～ 28 年(2015 ～ 2016)に行われた発掘調査で、竪穴住居跡内に堆積した土の中から見つかりました。

桜木遺跡(桜1丁目)の三角柱状土製品(写真2)

長軸長:9.5 cm 短軸長:7.8 cm 高さ:6.3 cm

ほぼ完全な形で残っており、角が丸く全体にずんぐりとした形で、三角形の左右の側面の大きさに違いがあります。5面すべてに浅い斜縄文が施されています。長軸方向に直径約5mmの孔が貫通しており、孔の位置は中心ではなくやや偏り、斜行しています。片方の側面の孔内は、やや幅の広い螺旋状の痕跡(写真2右下)が観察でき、もう一方の孔内は孔軸に沿って直線的な線条痕が観察できます。平成 27 年の発掘調査で、竪穴住居跡などの遺構の中からではなく、縄文時代の包含層(Ⅱ b 層)から見つかりました。

三角柱状土製品は、縄文時代の遺跡からたくさん見つかる土器に比べると、出土する量はとても少ないです。世田谷区ではこれまでに、今回展示した2点しか見つかっていません。この2点が出土した瀬田遺跡と桜木遺跡は、縄文時代の大きな集落遺跡です。祭祀(まつり)に使われたのではないかと考えられています。用途、使用方法は分かっていません。どのように作られたのかもよく分かっていませんが、詳細な観察や、製作実験などを行うことにより明らかになるかもしれません。(学芸研究員 前田知寿)

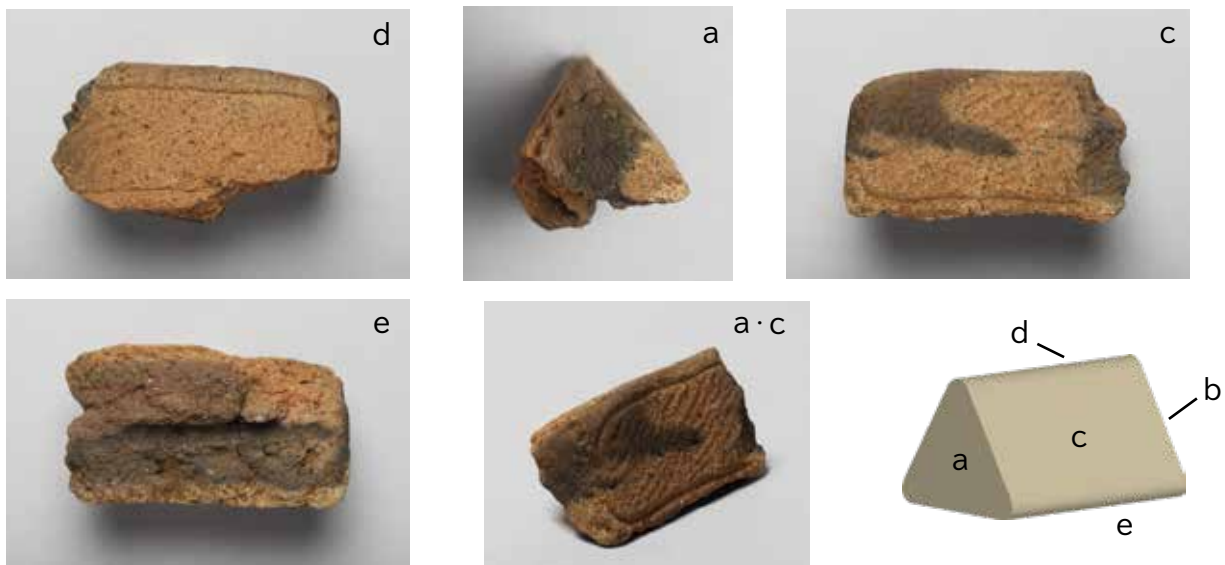
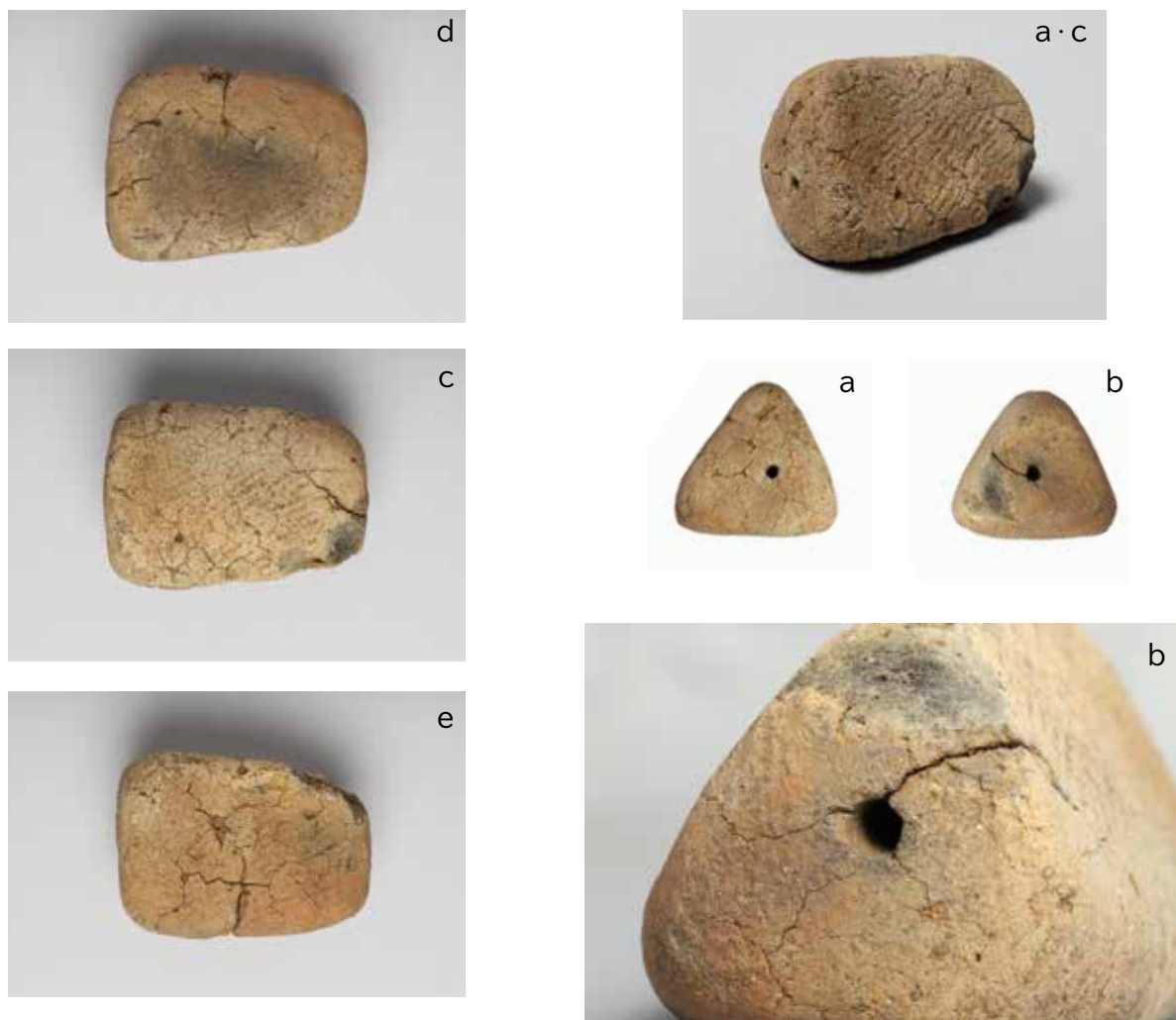


写真1 瀬田遺跡の三角柱状土製品(4面)

写真2 桜木遺跡の三角柱状土製品（5面）



孔内の螺旋状の痕跡

展示資料一覧

No.	資料名	出土遺跡	調査次	時期	出土位置
1	台形土器	桜木遺跡	1次	中期	198号住居址
2	台形土器	大蔵遺跡	1次	中期	西部地区3号住居址
3	台形土器	大蔵遺跡	1次	中期	Aトレンチ
4	三角柱状土製品	瀬田遺跡	37次	中期	155号住居址
5	三角柱状土製品	桜木遺跡	11次	中期	II b層(C区4-BB区)
6	土偶	松原羽根木通遺跡	昭和初期採集	後期	昭和初期採集(寄贈品)
7	土偶	蛇崩遺跡	3次	中期	H-12グリッド
8	土偶	鶴ヶ久保遺跡	1次	中期後葉	19号住居址
9	土偶	大蔵遺跡	13次	中期	I層(C-3区)
10	土偶	総合運動場遺跡	不明	中期	不明
11	土偶	桜木遺跡	8次	中期	1号墓壙
12	ネジリ棒状土製品	諏訪山遺跡	3次	中期	23号住居址
13	ネジリ棒状土製品	諏訪山遺跡	3次	中期	2号集石土壙

主要参考文献

- 世田谷区教育委員会 2017「2. 瀬田遺跡・瀬田城跡（37次）」『2015年度 世田谷区埋蔵文化財調査年報』
 東京都埋蔵文化財センター 2016『世田谷区 桜木遺跡IX』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第310集

世田谷時間と時の会

ご当地時間

ウチナータイム、博多時間、日向時間、出雲時間、仙台時間などなど、その地方独特の時間感覚を指して使われる言葉があります。これらのご当地時間と呼ばれたりもするようですが、単に時間にルーズなことを表すばかりではなく、おおらかでゆったりとした地域性、あるいは訪問先には約束より少し遅れて行くという気遣いを意味していたりもするようです。

今では耳にすることはないとは思いますが、昭和の初め頃には「世田谷時間」という言葉が使われていました。

世田谷時間

昭和9年(1934)8月に刊行された『世田谷区勢総攬』^{そうらん}に以下のような記事があります。

世田谷時の会

時間の^{れいこう}励行、厳守は社会生活上極めて必要なことである。にも拘らず此の地方ほど時の觀念の希薄なことは珍しい。

所謂、世田谷時間と云ふのがそれであってこの弊風を打破して、時の觀念を普及し社会生活の改善向上に資する為め、昭和七年二月世田谷時の会が生まれた。『世田谷区勢総攬』1934

「此の地方ほど時の觀念の希薄なことは珍しい」とあるように、「世田谷時間」というのは、残念ながら、おおらかさや気遣いを表すのではなく、単に極めて時間にルーズな地域性を指して使われていたようです。そしてこの地域の悪習を打破し、社会生活を改善するために「世田谷時の会」が設立されたというのです。

『世田谷区勢総攬』には続いて世田谷時の会の事業・役員名簿が記されていますが、それを見ていく前に、世田谷時間という語が使われている例を紹介します。

私は、世田谷医師会設立のころ、会長の早川先生のもとで、区政調査委員の役をいただき、親しく指導をいただいたが、時間の觀念のきわめて厳しい方であられた。

当時の、ルーズな世田谷時間というものを嫌われ、"まず、ここから正さなくては、と、どんな会合でも、定刻ぴったりに始められたものだ。このことは、強い印象となって、いまも残っている。

『世田谷区医師会史 聖職の群像 1953～1972』1988

早川先生とは、初代世田谷医師会長・早川^{はやかわおとぞう}於都造のことで、世田谷区医師会は昭和7年、世田谷区が誕生した年に設立されています。

「世田谷時間」が使われている例をもう一つ。

広川先生が農林大臣に在籍中それは多忙な毎日であったことと思います(中略)

いつも祝辞の中に時間を守りなさい。世田谷時間はすぐ改めなさいと、よく叱られたものでした。

「千歳青年部のこと」『追想の広川弘禪』1968

これは三宿に住んでいた政治家・広川^{ひろかわこうぜん}弘禪の追悼文集のなかの記述です。広川が農林大臣を務めていたのは、昭和25年から28年頃のこと、どうやら戦後も「世田谷時間」は生きていたようです。

世田谷時の会

それでは世田谷時間という弊風を打破するために「世田谷時の会」はどんな活動をしていたのでしょうか。

事業は必要と認むる場所に時計台の設置、講演会、展覧会、映画会及び時の思想普及に必要な^{ママ}陰会の開催の時に関する調査研究、出版等にして左記各所に時計台を設置してある。

- 一、玉電沿線、三宿、三軒茶屋、上馬、駒沢、新町、用賀、玉川各停留場前
- 二、下高井戸線、若林、下高井戸各停留場前
- 三、小田急沿線、経堂駅前

時計台設置に付き玉川電鉄会社は必要な場所、及び電気時計を回転せしむるに必要な電力を無料供給しつつある。

驚くことに、世田谷時の会は、玉川電気鉄道玉川線(玉電)の7停留場前と下高井戸線(世田谷線)の2停留場、小田急線の経堂駅前、合わせて10か所に時計台を設置したと記されています。

これらの場所に時計台が存在したという記録や写真をこれまで見たことがなく、今回改めて調べても確認することは出来ませんでした。時計台というと、街のランドマークとなるような高い建築物を想像してしまいます。そういったものが記録に残っていないとは考えられないのですが、ただ一つ、玉電の停留場に時計らしきものが写っている写真があります。



これは郷土史研究家として知られる鈴木堅次郎による「世田谷郷土写真帖」と題されたスクラップブックの中の1枚です。実は「世田谷時の会」役員名簿に顧問として鈴木の名があります。

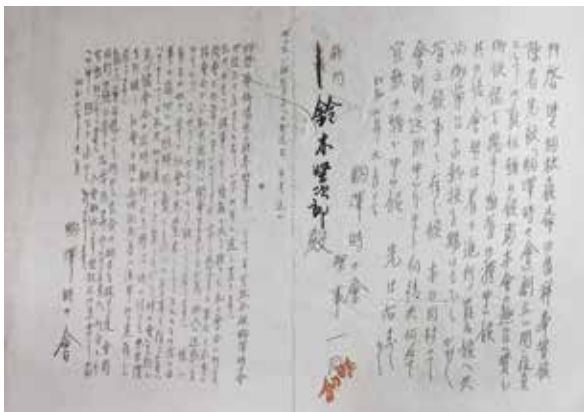
写真には「上馬郵便局と信用組合、昭和6年」と注記されているのですが、上馬郵便局は昭和7年8月に野沢から上馬に移転しているのです、それ以降に撮影されたものだと考えられます。左の建物が上馬郵便局、右が駒沢信用組合の建物です。手前の道路に玉電の軌道があり、信用金庫前に上馬停留場が写っています。そして、中央にいる和服の男性の背後に時計があるように見えます。これを時計台としていいとは思えませんが、いまのところ手がかり？はこの1枚の写真だけです。



もう一つの時の会

「世田谷時の会」設立から七か月ほど後、もう一つの時の会「駒沢時の会」が生まれています。

次の写真は当館が所蔵する鈴木堅次郎関連の資料の中にある「駒沢時の会」創立に関する書状です。



右半分は駒沢時の会から鈴木堅次郎に宛てられた顧問就任に対する礼状、鈴木は両方の時の会で顧問を務めていたようです。左は一般有力者宛て案内状で、設立の趣旨を次のように記しています。

先づ諸会合の定時励行から漸次時に対する悪習慣を打破し、社会生活の合理的改善に進軍仕り度存じ居ります。

案内状には役員名簿が付されています。名誉職ということもあるのでしょうか、世田谷と駒沢、二つの時の会の理事・顧問のおよそ半数が重複しています。また、どちらの事務所も上馬の東京育成園内におかれていて、同園の創始者・北川波津きたがわはつと松島正儀まつしままさのりがそれぞれ両会の理事と常務理事を務めています。

生活改善運動

大正8年(1919)、社会・家庭生活の改善・合理化を目的とする生活改善同盟会が組織されます。同会は衣食住・儀礼・社交など17項目に渡って改善を促していますが、その第一項が「時間ヲ正確ニ守ルコト」でした。翌年には、「時間を尊重し定時を励行する」ために「時の記念日」(6月10日)が制定されています。この頃「福島時間励行会」「岡山愛時同盟会」など定時励行を目的とする多くの団体が日本各地に結成されています。世田谷の二つの時の会もこうした動向のなかで設立されたのでしょう。

農村の時間と都市の時間

二つの時の会が設立された昭和7年は、東京市域拡張により、いわゆる大東京市が誕生した年です。隣接する82町村が新たな20区として編入されました。この時、世田谷町・駒沢町・松沢村・玉川村を合併して世田谷区も成立しています。新たに東京市となった地域では、宅地化と人口の増加が急速に進んでいました。そこでは、農村と都市の生活感覚の差が、新旧住民の時間意識の齟齬そごによる不都合として顕在化したのではないのでしょうか。「世田谷時間」もこうしたなかで使われるようになった言葉かも知れません。同様に「杉並時間」「練馬時間」なども使われていたようです。

(歴史専門調査員 上原 智)

主要参考文献：『世田谷区勢総攬』1934 区勢調査会 / 本橋伊二・高橋勝男「千歳青年部のこと」『追想の広川弘禅』1968/ 古畑積善編『世田谷区医師会史 聖職の群像 1953～1972』1988/ 西本郁子『時間意識の近代「時は金なり」の社会史』2006 法政大学出版局



【写真1】

- ①妊産婦手帳
(縦 14.3 × 横 10.3cm)
- ②妊産婦手帳
(縦 12.5 × 横 9.0cm)
- ③母子手帳
(縦 14.5 × 横 10.3cm)

現在、女性が病院で妊娠の診断を受けて自治体窓口へ「妊娠届」を提出すると「母子健康手帳」が交付されますが、その歴史を辿ると、昭和17年(1942)に誕生した「妊産婦手帳」まで遡ります。それが昭和23年(1948)「母子手帳」に改訂されます。当館にはその変遷を示す3冊の手帳が収蔵されているので、本稿でご紹介いたします。

「妊産婦手帳」の誕生まで

戦時体制下の昭和13年(1938)、人口政策を担当するために厚生省が創設されました。同16年1月には「人口政策確立要綱」を閣議決定し、人的資源確保のため「産めよ殖やせよ」政策を打ち出します。妊産婦の健康管理こそが流早死産を防ぎ人口増加につながることから、同17年7月妊産婦手帳制度が公布されます。

当時は自宅出産が90パーセント以上で、多くの妊婦は妊娠中に受診せず、あるいは妊娠末期に漸く受診するのが大多数でした。妊産婦手帳を交付し妊婦の定期受診を促すことで、妊娠中毒症等の早期発見につながりました。この手帳は、物資不足の中、妊産婦に対して米その他食料品、腹帯用木綿などを特別配給(特配)するための妊娠証明書としても使用され、妊産婦にはとてもありがたがられたようです。

では、実際どのように使われていたのか、3人のお子さんを産み育てた世田谷区北沢のAさんが残した3冊の手帳から見いきましょう。

妊産婦手帳【写真1-①】

昭和17年11月13日、妊娠7ヶ月で初産婦として東京府より交付。表紙に「第57号」とあり、かなり初期のものと思われます。手帳の構成は、妊産婦の心得10ヶ条をはじめ、妊産婦・新産児健康状態欄、分娩記事欄、必要記事、取扱の注意6ヶ条に出産申告書が添付された14ページ手帳形(表紙除)。妊産婦の心得には、毎月1回、でなければ出産までに3回は診察を受けるよう求めています。Aさんの手帳には、臨月(妊娠10ヶ月)の2月1日に一度だけ受診記録があります。ただし、Aさんが残した昭和17年4月～12月までの家計簿によると、妊娠に気づいたAさんは7月23日～8月25日の間に3回、電車で信濃町(新宿区)の産院を受診し、妊娠5ヶ月の戌の日には帯祝いをしています。9月には近所の産院に転院し、12月末までに計6回受診しています。にも関わらず2月1日の受診しか記載されていないのは、この手帳の使い方が病院にもまだ浸透していなかったからではないかと想像できます。

そして、Aさんは昭和18年2月14日、3000gの男児(第1子)を出産しました。分娩場所の記載はありませんが、少し難産だった模様です。

必要記事欄には物資配給が記録されており、出産後2月22日から10月24日までの間に小児用タドン、(乳児産衣用)中入綿、嬰兒(乳幼児)用衣料切符、妊産婦用煮干・椎茸、白玉粉、魚入昆布佃煮、甘酒の妊産婦特配を1回ずつ受けています。

妊産婦手帳【写真1-②】

昭和20年11月26日、妊娠4ヶ月で東京都より交付された16ページの手帳形（表紙除）。構成は昭和17年のものとはほぼ同じですが、サイズが小さく文字も細かくなり、紙質は粗悪になっています。必要記事欄は加配物資記入欄と名称を変え、その後ろには8ページに渡る加配物資購入券（有効期間は出産後1年間）が付いていましたが、使用済により切り取られています。また、取扱の注意が10ヶ条に増えています。

Aさんは、昭和21年5月28日に3200gの男児（第2子）を出産。分娩場所の記載はなく、今回は分娩に問題はありませんでした。妊産婦・新産児健康状態欄には1行も記載がなく、戦後の混乱期にあつて産前に健診を受けたかどうかは不明です。

Aさんは加配物資購入券を利用して、産前に妊婦用衣料切符とバターを各1回、産後にはバターを4回、東横百貨店では嬰兒用晒・ネル、愛育餅（註1）を購入しています。当時世田谷区では、妊産婦に愛育餅、養命酒が特配されていました。三越や東横などの百貨店は、代用品の研究・改良を行い、配給機関として時勢の要求に応じていたようです。

母子手帳【写真1-③】

昭和23年8月21日、妊娠4ヶ月で東京都より交付。手帳のサイズは大きくなり、横書き30ページ（表紙除）で紙質も良くなっています。構成は、出生

届出済証明、妊婦の記事、出産申告書、お産の記事、産後の母の健康状態、こどもの記事、お誕生までの乳児および学校へ行くまでの幼児の健康状態、配給物資記事欄【写真2】、木炭特別配給申請書、出産祝賀菓子・精米前渡券など加配物資購入券（下線部は未使用）および検印欄、乳幼児発育平均値グラフというように、妊産婦自身の健康管理に加えて、対象を幼児期まで拡大したものとなりました。

以前の手帳には記載がなかったAさんの妊婦健診も、手帳交付後の9月から毎月1回記録されています。3回目の妊娠ということもあり、以前に比べて使いこなしている印象を受けます。

そして、Aさんは昭和24年2月8日に3300gの女児（第3子）を分娩に問題もなく、自宅で出産。この手帳もやはり妊産育児に必要な物資の配給手帳として利用されており、Aさんは手帳を受け取ったその日からガーゼ綿を、その後も出産前に妊婦用のネル、晒、バターを1回ずつと、産後1年間は、石鯨、卵、ネル、糸（各1回）のほか毎月1回ミルク、乳製品、牛乳（生後4ヶ月から）、砂糖を配給されています。

以上、3冊の手帳を見てきましたが、手帳の創設時はその使い方すらよくわからなかったものが、少しずつ制度そのものが世の中に浸透し、記述も増えていった様子がうかがえました。しかし、戦中・戦後という時代背景もあり、3冊とも物資配給の記載が最も多くを占めていたのも事実です。そして、昭和41年（1966）、母子手帳は母子健康手帳と改名され、母親自らが子どもの発育過程を記録するページが増え、健康管理手帳の形が整えられました。その後、幾度かの改訂を経て現在のような形になり、母子の健康を守るための重要な役割を担い続けているのです。

（歴史専門調査員 小林信夫）

（註1）湯・水でかき混ぜると餅になるもの。

主要参考文献・資料

『区政概要』（世田谷区役所・1947）、『三越のあゆみ』（株式会社三越・1954）、『中野区史 昭和資料編2』（中野区・1972）、本多洋『母子健康手帳の変遷とその時代的意義について』（社団法人日本助産婦会・1986）



【写真2】配給物資記事欄

展示

コーナー展示

〈戦後 80 年 昭和 100 年〉
昭和の世田谷と小学校
4月5日(土)～7月27日(日)



コーナー展示

〈戦後 80 年 昭和 100 年〉
戦時下の暮らし
8月2日(土)～9月21日(日)



コーナー展示

世田谷線 100 周年
9月27日(土)～10月12日(日)



ミニ展示

世田谷ゆかりの近世画人IV
菊池容斎
4月26日(土)
～6月22日(日)



季節展

ホタルとさぎ草伝説
6月28日(土)～7月27日(日)



2025 世田谷区遺跡発掘調査速報展
—最新の調査成果から—

8月2日(土)～
10月19日(日)



4月

5月

6月

7月

8月

9月

講座・教室・その他

歴史講座

古文書講座 入門編
6月1日～22日
毎週日曜日(全4回)
講師:角和裕子(学芸員)



夏休みワークショップ

石器を触ろう!
8月8日(金)
講師:前田知寿(学芸研究員)



野外歴史教室

桜丘と石造物を巡る
10月17日(金)
講師:松浦瑛士(学芸員)



博物館実習

7月31日～8月6日
実習生:8大学8名



発掘する形でうちわを彩ろう!

8月9日(土)
講師:河内啓成(横浜国立大学
准教授)



吉良氏ゆかりの地めぐり —目黒地域—

11月12日(水)
講師:鈴木 泉(学芸研究員)



事業報告

特別展

世田谷の用水

10月25日(土)～12月21日(日)

◇ギャラリートーク 11月8日、29日



コーナー展示

縄文時代の変った「かたち」

8年1月31日(土)～3月29日(日)



季節展

ポロ市の歴史

8年1月4日(日)～1月25日(日)



ミニ展示

昔のくらし

8年1月4日(日)～3月29日(日)



10月

11月

12月

令和8年

1月

2月

3月

美術講座

①ミュージアムの魅力～家族でミュージアムを楽しむ

11月30日(日)



②遊びながら楽しく学ぶ作品鑑賞

8年2月13日(金)



講師：藤田百合（女子美術大学准教授）

特別展関連講座

大東京の水事情
—100年前の世田谷を中心に—

12月7日(日)

講師：松本洋幸（九州大学教授）



歴史講座

古文書講座 中級編

8年2月8日～3月1日

毎週日曜日(全4回)

講師：角和裕子（学芸員）



美術史講座

江戸の仏像入門

8年2月27日～3月13日

毎週金曜日(全3回)

講師：鈴木 泉（学芸研究員）



民俗学講座

①喜多見台から成城へ 開発の歴史

8年3月11日(水)

講師：松浦瑛士（学芸員）

②歴史の中の成城～郊外とミドルクラスの生活

8年3月18日(水)

講師：新倉貴仁（成城大学教授）

令和8年行事予定

《展示事業》

ミニ展示

郷土資料館で“1回休み”
—館蔵の絵すごろくを見る・遊ぶ—
4月11日(土)～6月21日(日)

季節展

ホタルとさぎ草伝説
6月27日(土)～7月19日(日)

コーナー展示

〈戦後81年〉戦時下のくらし vol.2
7月11日(土)～10月11日(日)

2026 世田谷区遺跡発掘調査速報展
—最新の調査成果から—
8月1日(土)～10月11日(日)

特別展

江戸の絵画を楽しむ—風景と風俗—(仮称)
前期:10月17日(土)～11月15日(日)
後期:11月21日(土)～12月20日(日)
※前期・後期で
展示品入替え



《講座・教室・その他》

4月

野外歴史教室 桜丘と石造物を巡る
4月24日(金) 講師:松浦瑛士(学芸員)

5月

歴史講座 古文書講座 入門編
5月10日～31日毎週日曜日(全4回)
講師:角和裕子(学芸員)

6月

博物館実習

募集:4月1日～5月31日
実施:7月28日～8月2日

7月

8月

夏休みワークショップ

石器を触ろう!
8月5日(水)、7日(金)
講師:前田知寿(学芸研究員)
絵の具を作って、うちわに描こう!
8月8日(土)
講師:河内啓成(横浜国立大学准教授)

9月

10月

11月

特別展記念講演

前期・後期に各1回
講師:伊藤紫織(尚美学園大学教授)他1名

12月

以降の行事予定は次号で掲載いたします。

《新収集資料》

○寄贈資料:駒沢練兵場軍事訓練日誌2点、昭和10～30年代写真26点、東京府北多摩郡砧村全図ほか387点、天正19卯年検地帳ほか362点、山田邸建築申請資料ほか12点、昭和30年代写真51点、電化80周年記念乗車券ほか6点、新堀家文書・木造阿弥陀如来坐像計60点、丸山永畝筆 鳥図1点、玉川電気鉄道の給電プレート1点、昭和20年代の世田谷のボロ市ネガフィルム24点

○購入品:長圓寺明細取調簿(大正2年)ほか4点、富嶽真景画幅(平井顕斎・江戸時代)、等楊筆富士清見寺画賛模写幅(模者不詳・江戸時代)、富士巻狩画三幅対(江戸末期)、養老瀧画幅(日比野鶴翁・江戸末期)、紅葉梅画貼交屏風(菊池容斎・江戸後期)、経字彩色弁才天画幅(加藤信清・江戸時代)

資料館だより No.83

発行年月日 令和8年3月24日

編集発行 世田谷区立郷土資料館

〒154-0017 世田谷区世田谷1-29-18

☎03-3429-4237 FAX03-3429-4925 広報印刷物登録番号 No.2446